
こだわる男

士功征宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こだわる男

【Zコード】

Z3955A

【作者名】

土功征宗

【あらすじ】

○こだわる二人の男の話（追記、38口径でも反動が凄まじい物もあるから銃をなめるなよとの友人談です）著、（ 、 、 ） y-

前トキしろう

(前書き)

内容は銃に伴つ記載で、ハンドガンに関する用語があります。出来るだけ説明文を添えましたので、なんとか理解していただけたと思いますが、苦手な方はご遠慮ください。（尚、後書きに注意事項あり）

まあ、世の中頭のおかしな野郎から、何考えてんだか分からん奴等が少なからずいるもんだ。生憎びこの国行つたつてそりや変わらねえ。肩が触れただけで半殺しにする奴もいや、明らかにめえが悪いのに逆ギレする馬鹿。酔つ払つてなんとなくムカついたつてだけでドたま（頭）目がけてアーミーナイフ突き立てるアホもいる。

俺は今、ゆらゆら寄られている。

澄んだ青空に、日照りも良好。アスファルトに照り返す日差しが眩しそぎて気持ちが悪い。

こんな日に黒のイタリア製スーツに身を包んだ俺の飼い主ロバートもそんな“イカレ”た人間の一人だ。

そんな俺は猫だよ。オスの八歳でメアリーなんてメスの名前なんか付けられちゃつてよ。外でりやポーカーフェイスの俺だから、可愛いレディニヤンコには“ポーター”って名で通してるが、バレたら一生笑いモンだぜ。

そんな俺がなんで揺られてるかつて言つと飼い主は自殺したいんだけど。そこで俺まで引きつれて、ガンショップに行くつてな話しな訳なんだな。

銃で死にたいらしく、しかもスーツや家具同様に、それにはこだわりがあるらしだが、俺の知つたこっちゃねえんだよ。

まったくよ。俺を連れていく理由が分からねえし、こいつが突如死にたくなつたつてのだつて理解不能と言うか理解しがたいんだよ。

まあ、どうでもいい話しだし、何にしても猫の俺じやこの飼い主を止める事もできねえし、どうするのか見届けるとするわ。第三者的にね……

*

ゆらゆら揺られていた動作がピタリと止むと、田の前には目的のガンショップがあつた。ロバートはそこに吸い込まれるように躊躇いもなく入る。

『C・Sno』

こんな看板が赤に黄色い枠取りされデカデカと掲げている店。店内に入ると少し薄暗い気もするが、眩しい外界から入ったときの錯覚にすぎない。

入り口から入ると、両サイドに大型の銃が所狭しとディスプレイされているが、防犯がきちんとされているのが一目で分かるほどに嚴重さだ。

入り口の真正面にある奥にはカウンターが見える。しかも手元の窓口が開けられているだけの金縫み張り。

それでも正面に立てば、そのぞきつい迄の店主の顔がお田見えする。

「いらっしゃい」

あぶらつけのあるゴツゴツした顔にオールバック。顔中に行き渡るかのような不精髭にモツサリの胸毛を白い下着からはみ出している。シャツの袖をまくつてでる腕からも毛がモサモサ。

そんな奴がロバートの前にのつしりと現われ、その黒スーツのナリに細面の顔、定期的に散髪を伺わせるような整つた黒髪。そんなロバートを下から舐め回すようにジロジロと見る。

店主はロバートを見定めるなり、鼻で笑つた。

そんなことにも動じず、金網越しから手前に出つ張ているカウンターにメアリーの入つたカゴを「トリと置いて言い放つ。

「銃を見たい。ハンドガンだ」

店主はメアリーを一瞬ジロリと見る。

そんな薄気味の悪さに寒気が首から尻尾の先へかけてゾクゾクとメアリー襲つ。

「まあ、うちはどんな客だつて歓迎するぜ。へつへつへつ」

そんな事を言つた後、店主はまず『白爛の店の話をし始めた。

「うちは看板に掲げるC・ショップ。つまりクレイジーなものを扱つてるぜ。本当は名前の頭文字だけ」

すると手元に置いていたウイスキーボトルに油性で“エンジンオイル”と書かれたのを手に取り一気に飲み干し、ゲップ一発かました。

ゲフツ！

「ふあ～きつくうう！」

ロバートは表情一つ変えずにそれを眺め、喋りだすのを待つていたのである。

すると、店主は弛んだ唇を手の平で拭いながら喋りだす。

「ああ銃はもちろんだがポンテージやレザー製品、金具、電動工具、シリコン製品などなど。純正製品からハンドメイド、パフォーマンスも受け付けるぜ、へつへつへつ」

しかし、ロバートは最初に言つた通り目的は一つ。それをあっさりと言つた。

「ハンドガンを」

拍子抜けするような客とは思いつつも、店主はめぼしいハンドガンをまざぐり出した。

「ハンドガンなら1818頃のリアのフロントロック式から最新のショットショットでお目見えした、生まれたてのハンドガンまで何でもござれだ」

そう言つて順々にもつたいぶるよにハンドガンを出しはじめた。
「まずはS&Wの37か39はどうだ？」この辺は警察はもちろん
だが、格安で一般人にも多く出回つてゐる。初歩的なハンドガンだが
カウンターに置かれた銃を手に取ることもなくあつたりと言い返
す。

「次

言い返す言葉も出ないゴツイ店主。

しかし、客の要望である以上次に行くしかない。

「じゃ、珍しいのでいくとドイツK、P7。小型だが、スクイズ
ゴツク式で扱いは難しい。おかげで安定性はなくブレるし、引き金
引いただけでは弾はでねえ。その分、暴発を防ぐだけじゃなくコイ
ツを人に奪われた場合なんぞ余程熟知した奴じやないかぎり返り討
ちにあつて射たれる事も減る。そんな一品よ」
ロバートはしばらく眺めていたが、やはり手に取る事もなく、

「次

さすがに半ギレになり店主が半ゴリラになりかけてきた。

「あんたよ。何か目当てのハンドガンあるなら言つてみろよー。そ
の方があんたのローテンションにいちいち胸くそ悪くしねえで楽な
んだよ」

店主が怒るのも当然だろう。愛想良く説明付きで薦めているにも
関わらず、ロバートは冷たくあしらつ素振り。しかし、そんな事を
見透かしたように店主に語り掛けた。

「ご主人は素晴らしいガソマニアだ。たとえ私が目星をつけて来て
いるにせよ、ご主人のお薦め品と説明を聞きかずにはいれない。こ
だわりを感じますから」

「こだわり、こだわり、こだわり、こだわり……」

店主の頭に響く“こだわり”は心地よかつたにちがいない。態度
を一変した。

「へつへつ、お客さんもお見受けしたといふ、素晴らしいこだわり
屋さんでげすね！ 通りで趣味のいいスポーツと猫ちゃんなど」

いくら機嫌がよくなつたとは言え態度を180度となると多少の薄気味悪さも感じる気がするが、ロバートは淡々と話す。

「このステッスはアメリカに来てまだ日の浅いイタリア人の若者が仕立てた代物ですが、生地が良くて、しかも丈夫で長持ちするのでお得意様になりますよ」

こだわる男一人の世界になつていた。

気分を良くした店主は、ロバートの言つように店主お薦め品を次々と出しはじめ、店主のショータイムとなつていく。

「気分爽快なつたところで早速。登場しますはHISSRのTT33。大戦後も愛される名銃トカレフ。弾はライフル銃のようなボトルネットク（酒壺型）だから貫通しやすい。だからストッピングパワーがない分、殺傷能力は低い。護身用として人を無闇に殺したくなれば適任だが、安全装置がないから気を付けなきやならねえ」

（ストッピングパワーは簡単に言うと貫通するよりも標的内に停止する方が威力を増す。究極のホローポイントと言つ弾。標的に命中すると弾先が潰れ、きのこ状に広がつて標的内残る。一時、問題になりました）

すると薄ら笑みを浮かべて最後に言い放つ。

「クレイジーだぜ、クレイジー」

（暴発しやすいイメージがあるが、それは某国のコピーが原因）やはり手に取る事無く次へと促した。

店主はロバートに見合つたハンドガンを見立てて次々と出す。

「オーストラリアの26。グロツクは？」

「次

「じゃ、護身に最適のドイツP228かP239！？」

「次

「むむつ。ならばあんたの好きなイタリーのM93Rのセミと3点バースト切り替え付きの機関ハンドガン。市販はされてねえ代物だが違法じゃねえ。需要があれば供給されるんだよ。こいつのカスタムは某ロボット警察（おそらく実在しないと思つが、あってもおか

しきはないだれつ)が、ぶつ放していたことから有名になつたクレ

イジーな一品だ」

ほとんどバナナの叩き売り状態。しかし、ロバートは興味を引かない。

店主は悩んだ。顎に手をあて、ロバートを眺める。

「うつ！」

店主は氣付いた。その身なりに合ひ銃を差し出してみよつと。

「よし！ ガンマニア必見。ピースメーカーの愛称で親しまれるM1873。軍にも長きに渡り愛用されたコルトSAAだよ。シビリ、アーティにキヤバ、バントラのバレルは色とりどりの選び放題。シングルだから安定したリボルバーは使うも飾るもよしの一品だ！」

するとロバートはここにきて初めてハンドガンを手に取つた。ハンマーを引いて渡されると、それを手に取るロバートは引かれたハンマーを静かに戻す。

店主はその行動にドキドキ。初めて赤ちゃんがおもむりに興味をもちはじめ、一体どうするのだろう！ に、ちょっとだけ似た心情。すると、ロバートはシリンドラーを左手で押し出しクリリと回した。

ジ――――！

独特の回転音がなる。

すると、そのまま銃身を自分に向けるように反転させ、銃口側から全体を眺め、しばらく覗いた後、クルリと元に戻すとシリンドラーをはめる。銃にとつて左面は顔。そこを静かに眺めると、銃を構えてみた。

それを手に馴染ませていると、いきなり銃身を手前に回し指で弾き反転させると、勢いそのままに横に向け外側から内に捻るように回すと、銃身が下に向き、グリップの下部が相手に向くように手に納めた。

店主は目を見開いてかたまつてしまつた。

ハンドガンの扱いが以上に慣れていたからだ。

店主の顔が溶ける口ウのようにトロトロと変形していく。そして完全にスケベ笑いに変わっていた。

「あんた気に入つたぜ！」

クレイジーだぜクレイジー。がつはつは。人は見かけじゃね～なロバートは高笑いする店主の前にゴトリと銃を横向きに差し出した。

「いいハンドガンだがこいつじゃない」

店主はニヤニヤしながら考える。

「同コルトの1911も軍人に愛され、今も愛好者がいるが……あんたは惚れないだろうな」

銃の扱いができるとなると幅は広がる。しばらく考えて店主は逆に一点にしほつた。

「どうかここまでくると、『俺は何が欲しいか当てましょクイズ』になつてきている。もちろん店主はドキドキする密にハイテンションだつた。

「あんたハンドガンをなんの目的に使うかしらねえが、ここから見せるのは本来ハントティングに使うハンドガンだぜ」

ロバートはそれでもクールに答える。

「楽しみです」

「じゃ、初のマグナム使用のAMオートマグ。但し、オートジャムと批判されるほどよくジャムる（単純に言えば排莢がつまる事）から、お飾りがいいがな」

さすがにいらないとばかりの顔をみせるロバート。

「なら、ブラックホール……んー。よし！ 50AE、IMIのデザートイーグル。こいつは我が国アメリカのリサーチ開発のイスラエル生産で、·357の頃は不評。しかし、·44で安定をもたらし需要が増えて、現在にいたる代物だ」

（マグナム弾使用銃はイメージ的に爆発的威力みたいなイメージがあるが、ちゃんと反動を押さえるための重量設計がなされているた

め、女性でも重量に慣れれば以外に射てるんです。・357や・44くらいなら）

するとロバートがここにきて悩み始めた。しばらく黙っていたが、「んー。在り来たりだがいい。ロングバレル使用もありますか？」

「残念だがしばらく時間が掛かるぜ」

店主の考えはヒットした。どうやらロバートは強力なハンドガンが目当てのようだと気付いた。

「よし。これが最後だ！ 安くしてやるぜ。最強の・454カスル弾使用のルガーのレッドホーク、ブラジルのトーラス、レイジングブルでどうだ！」

（カスールも射てないことは無いだろうが、多少マグナム弾に慣れただ人でも、射ちすぎると手首やるか、皮が向けてしまうらしい。一応、注意）

すると、またしばらく考え込むロバート。

店主は食らい付いた事がうれしくてたまらない。が、しかし、微笑んでいたのはロバートだった。

「ご主人。最後なんて嘘ですね！」

「な、なに——」

完全に見透かされていた。

（そうだ。この男は始めからあのハンドガンが目的だったのか……）

「負けたぜ」

ロバートはゆっくりと腕を組ながら、店主に言った。

「M500があるでしょ」

店主は隠しきれない事を察知してすべてを捧げた。

「そこまで扱える自信があるんじゃしうがねえ。悲劇の中に瀕死の状態でS&Wが威信をかけたハンドガン。世界最強のみを掲げて2002年（03年頃との話も）にデビューさせた、まさしく大砲の異名が似合うハンドガンだ。・500S&Wの専用弾から造りは

じまつた化け物だ。M500自体も特殊なXフレームを採用。ダブルアクションリボルバー（シングルも含む）弾デカすぎつてシリンドーに5発で射ち手の健康を保障しねえと言つわけわからん宣伝文句付き！さらに、ある機関じやこんなもん一般人にもたせたら警察がやべえだと疑問符も投げ掛けられたいわく付きハンドガン」（アクションとは簡単に言うと弾を叩きだすハンマー部位がトリガーリ（引き金）を引くと連動しするのがダブル。実銃だと分かるが扱い慣れないでカッコつけるとブレて当たらんよ。そんで一発ごとにハンマー引くのがシングル。西部劇でよく左手で素早く弾く動作みますよね。負荷と言うべきか？減少し安定して命中率が上がる。どちらが扱いやすいかはその人によるんだろうね）

店主は興奮しすぎてしまい、一層顔がアブラギッシュにテカリはじめた。

そしてシルバーモデルの一丁を叩きつけた。

「コンペンセンター4と8だ！ どっちがいい

」の熱き戦いに必殺ブローたたき込むようにロバートがつぶやく。

「2004デビューのハンターください」

店主、ノックアウト！

「分かつてたのね、ぐほつ……」

ハンターそれは、パフォーマンスセンターの言わばカスタム。まさしくハンティング用のモンスターハンターです。その異質なハンドガンにアメリカ人は惚れ込んだ。実際。ハンターだけではなく、M500はいまもバックオーダーが止まない。

（これがハンドキャノンと称しているが、マグナム使用弾はほぼハンドキャノンといっていいだろ？。マグナム弾は本来狩猟用ですからね）

「負けたぜ。クレイジーだぜクレイジー。身分証明書提示してくれロバートは満足だつた。

「毎度あり～」

こだわる男は世界最強のハンドガンで頭を射ちぬいて自殺したか

つたのだ。

長い時間店内にいたせいか、辺りは綺麗な夕日で街をオレンジ色に染めていた。美しい黄昏。ロバートは満足気。帰りの足取りは軽かつた。

しかし、みなも一度はないだろうか？たとえば出掛ける前に、服をあれがいいかな？これがいいかな？この時ばかりはこだわってみようかな！？だが、その為に迷いに迷い疲れちゃって結局こんな感じでつて普段と変わらないなんてこと。

実際、身近に髪型にこだわる奴が、いつまでたってもキマらないと嘆き、散々、時間かけて待たせられた挙げ句、ワックスをつけた髪を洗い直し、結局ノーマルヘアでした。なんて事が。もちろんロバートも店主とのこだわり合戦で疲れてしまい、目前でのハンドガンを手にした満足感で、すっかり自殺願望がなくなってしまっていた。

*

おう！ 久々だな。俺、メアリーだよ。冒頭でぼやいてた猫だよ。見たかうちの飼い主の馬鹿さがげんがよ。やっぱ世の中何考えてんだか訳のわかんねえのが右見ても左見てもいやがる。

嗚呼、腹減ったなあ。

俺はアメリカンショートヘアで、外にでて可愛いレディーニャンコの前ではポーターだ。誰がなんと言おうとポーターだ。文句は言わせねえ。

それが俺の“こだわり”だ。

END

(後書き)

○最後まで本作『こだわる男』を読んで頂き有難う御座いました。
私は銃刀（実銃、真刀）に触れたかと言わればYES。
かと書いて所謂そのスジではありませんし、法を犯した訳でも御座いません。近年、実銃、エアガンの類での事件があり、銃社会の国々でも悲惨な事件が多発しています。それは刃物も同様。銃刀以外も武器になりますが、ここではあえて“銃と刃物”とさせて頂きますが、海外観光地で実銃射撃体験などできますし、（日本でもクレーン、狩猟などありますが）できれば興味本位などだけではなく、危険性の本質も考えて頂きたいと願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3955a/>

こだわる男

2010年10月9日05時11分発行